加藤周一著作集

5

加藤周一著作集

日本文学史序説 下

5

加藤周一著作集

日本文学史序説 下

加藤周一 編集

平凡社

加藤周一著作集5（全15巻）
日本文学史序説 下
一九八〇年五月九日 初版第一刷発行

著者 加藤周一（かとうしゅういち）
装幀 池田満寿夫
発行者 下中邦彦
発行所 株式会社 平凡社
〒一〇二 東京都千代田区四番町四
電話 〇三（二六五）〇四五一
振替 東京八一二九六三九
印刷 明和印刷株式会社
製本 和田製本工業株式会社
定価 一八〇〇円

© 加藤周一 1980 Printed in Japan.
製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい（送料小社負担）。

目

次

第七章　元禄文化　3
「元禄文化」について　5
宋学の日本化　16
徂徠の方法　25
白石の世界　37
『葉隠』と『曾根崎心中』　49
俳諧について　65
町人の理想と現実　76
第八章　町人の時代　87
教育・一揆・はるかな西洋　89
文人について　96
富永仲基と安藤昌益　107
心学について　123
忠臣蔵と通俗小説　133

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

平賀源内と蘭学者たち　148
梅園と蟠桃　156
本居宣長　172
上田秋成と国学者たち　185
歌舞伎と木版画　195
笑いの文学　206
第九章　第四の転換期　上　219
近代への道　221
国体と蘭学　232
詩人たち　253
日常生活の現実主義　266
町人の逃避　276
農民たち　287

第一〇章　第四の転換期 下

吉田松陰と一八三〇年の世代　301
福沢諭吉と「西洋化」　312
中江兆民と「自由民権」　323
成島柳北と江戸の郷愁　334
一八六八年の世代　344
露伴と鏡花　357
鈴木大拙と柳田国男　368
子規と漱石　378
鷗外とその時代　389
内村鑑三と安部磯雄　399
「自然主義」の小説家たち　411
幸徳秋水と河上肇　427

有島武郎と永井荷風　439
第一一章　工業化の時代　451
一八八五年の世代　453
谷崎潤一郎と小説家たち　462
木下杢太郎と詩人たち　477
一九〇〇年の世代　492
マルクス主義と文学　501
芥川龍之介とその後　512
外国文学研究者と詩人たち　527
三つの座標　537
終章　戦後の状況　551
戦争体験について　556
「第二の開国」について　563

高度成長管理社会について 571
あとがき 579
初出一覧 582

加藤周一著作集　5

日本文学史序説　下

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

第七章　元禄文化

「元禄文化」について

一七世紀末、元禄時代（一六八八―一七〇四）を中心として、大都会（大坂、京都、江戸）に栄えた文化を、俗に「元禄文化」という。その特徴は、何よりも、学問文藝の多くの領域に、独創的な工夫が相継いであらわれたということである。荻生徂徠（一六六六―一七二八）は、中国の古典について実証的な文献学的研究の方法を確立し、新井白石（一六五七―一七二五）は、歴史から言語学まで、政策論から詩文まで、広汎な知的領域における活動を、一身に兼ね具えていたという意味で、その西洋における同時代人ライプニッツ Leibniz（一六四六―一七一六）と同じように、劃期的な人物であった。同じ時代に、近松門左衛門（一六五三―一七二四）は、竹本義太夫と協力して、人形芝居の脚本を文学的に洗煉し、おそらく人形劇としては世界中に比類のない独特の形式を完成した。また松尾芭蕉（一六四四―一六九四）とその一派の俳人は、俳諧連歌から俳句を独

立させて、日本語の抒情詩の新しい形式を発展させ、井原西鶴（一六四二―一六九三）は、町人の日常生活の、殊に経済的な面を含めての現実を、そのものとして正確に描写し、日本のみならず、中国や西洋の小説の歴史にも先例を見出し難い最初の「リアリズム」小説を作った。

藝術においては、宗達の後一〇〇年、尾形光琳（一六五八―一七一六）が、宗達の様式に学びながら、宗達の貴族的題材ではなく、町人の日常身辺の風物を描き、日本の絵画を大陸の強い影響から解放した。

このように劃期的な仕事をなし遂げたのは、一六四〇年代の初めから六〇年代の初めにかけて、およそ二〇年間に生れた著作家と藝術家であった。そのなかで、西鶴・芭蕉・近松門左衛門は比較的早く、いくらか後れて、一六六〇年前後の世代、白石や光琳や徂徠、また室鳩巣（一六五八―一七三四）、山本常朝（一六五九―一七二一）、宝井其角（一六六一―一七〇七）、尾形乾山（一六六三―一七四三）などが加ったのである。彼らの家族的背景は、画家・工藝家（光琳・乾山の兄弟）と小説家（西鶴）を除いて、その圧倒的多数が武家の出であった。しかし読者（受けとり手）は必ずしも武家にかぎられていたわけではない。

白石・徂徠・鳩巣・常朝等は、仕官して、武家のために書いた。近松門左衛門・芭蕉・其角は、それぞれ武家または医家に生れ、家業を廃して専門の作者となり、主として町人のために書いた。武士支配層がその内部で文化を生産消費し、町人大衆がみずから生産すること少く、主として武士層から出た作者の作品の受けとり手であったというかぎりでは、一七世紀末の状況は、一七世

紀初めの状況と著しくちがうものではなかった。しかし大きなちがいが二つある。その一つは、一七世紀初めの「仮名草子」の作者が、彼ら自身の階級の価値を大衆化しようとしていたのに対し、一七世紀末の武家出身の作者のなかには、みずから町人層の価値を採用することによって、町人観客に訴えようとする者があらわれたことである。後に詳述するように、近松門左衛門の場合（殊にいわゆる「心中物」）は、典型的である。その二つは、例外的ではあるが、町人大衆のなかからも大作者があらわれたということである。すなわち西鶴。またそれよりも早く、一七世紀後半には、後述する伊藤仁斎（一六二七―一七〇五）のような町人出身の大学者も活動していた。「元禄文化」は、決して、「町人文化」ではなかった。しかし、その重要な一面が「町人文化」と深く係っていたのである。

「元禄文化」の内容上の特色は、第一に、それが徹底して世俗的な文化であった、ということである。室町時代にすでに進行していた仏教の世俗化は、一七世紀の前半にはほとんど完了していた。宋学は、時代の現世主義に、理論的な支柱を提供することで、それを強化するために役立ったといえるだろう。その理論の内容は、「理気」説であり、宇宙と人間を作る究極的な材料としての「気」はもとより、「気」の運動を支配する法則としての「理」も、宇宙に内在するものとされる。すなわち宋学は、超自然的な力を介入させず、その意味で全く世俗的な立場から、世界を包括的に説明しようとする体系的な努力であった。宋学のそういう面は、仏教的世界観を克服するために役立つ（そもそも程朱の学は、宋朝において、仏教との対決から発明されたのである）。

宋学の他面は、古代儒教からひきついだところの、政治倫理的な綱領である。仁・義・礼・智・信の道徳的価値。また具体的な人間関係については、親子、君臣、夫婦などのあるべき姿を強調する宋学のこの面は、上下関係の社会的秩序を支えるもので、徳川身分体制の維持に役立つ（徳川権力が朱子学の普及を鼓舞したのは、むろん、そのためであったろう）。一七世紀の後半におこったことは、その宋学から包括的な形而上学的部分を切り捨て、その概念的道具を駆使しながら、自然学や倫理学や政治経済学を、すなわち日常生活の実際に役立ちそうなところを、発展させようとすることであった。後に述べるように、宋学の非形而上学化こそは、まさに宋学の「日本化」に他ならなかった。一七世紀末、元禄時代は、その過程の頂点にある。この時代に、新しい宗教運動はなく、新しい宗教思想家はあらわれない。絵画は浄土の蓮を描かず、現世の紅梅白梅を描き、工藝は寺院を飾らず、豊かな町人の居室を飾る。三味線の音楽は、仏を讃美するのではなく、心中に赴く男女の情愛を詠う。小説の主人公は、来世の救いではなく、この世での「好色」をたのしむか、富をつくることに、その関心を集中する。思想家は「怪力乱神」を語らず、死よりも生を語り、歴史と制度と倫理的価値に注意を向けていたのである。

「元禄文化」の第二の特色は、国内では徳川政権が安定し、国外からの挑戦はなく（鎖国を打ち破る力は、成立したばかりの清朝にもなく、遠い西洋諸国にもなかった）、体制の秩序が到底抜き難い与件として受けとられていたということ、またまさに社会の枠組そのものが議論の外にあったということと関連して、価値の二重構造がその枠組のなかに発達したということである。表の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo